

NPO 活動推進自治体フォーラム島根大会（第1分科会）

テーマ

多様な主体による協働の明日を考えよう！～チームづくりから生まれる協働～

事例報告者

- ・加納尚明（札幌市市民活動協働推進担当課長、特定非営利活動法人札幌チャレンジド運営委員）
- ・竹田尚子（特定非営利活動法人おやこ劇場松江センター 理事長）
- ・三代隆司（特定非営利活動法人しまね歴史文化ネットワークもくもく副理事長）
- ・杉原幹雄（特定非営利活動法人大山中海観光推進機構理事）

コーディネーター

- ・林 泰義（特定非営利活動法人シーズ・市民活動を支える制度をつくる会代表理事）

●趣旨

「社会が抱える課題の解決」に向かって、NPO、行政、企業など様々な主体が手を携え、協働で取り組む事例が全国的に増えています。さらに、個性の異なる複数のNPOの連携や、行政界さらには国を超えてネットワークを広げていく組織など、さまざまな連携も広がっています。

「課題の解決」には、情報の収集や発信、アイデアと実行体制、資金調達など様々な要素が不可欠であり、課題によっては、単体の組織にとどまらず、他分野や様々な主体の仲間を募り、一つのチームをつくるのが重要となってきます。各分野・各主体の個性を生かし、チームの多様性を力に変えることは、まさしく明日につながる協働のカギです。「どのようにしてチームは生まれるのか」、「チームの中での役割分担は」など、いくつかの事例を通して、人・もの・資金・情報を駆使した協働のチームづくりについて考えていきます。

●内容

■林コーディネーター

ワールドカフェは、最近あちこちで広がってきました。ワールドカフェと言わなくてもワークショップと言えばわかる方がおられますが、ワールドカフェはカフェということで、みんなカフェに来て、テーブルごとにお茶を飲みながらお話をしている雰囲気、テーブルかけにそれぞれの想いか提案とか問題を書きとめていくというやり方です。それで、それを15分ぐらいのお茶で、今度は違うテーブルに行くと、そのテーブルに前の書き記したことがあって、この前にお茶飲んだ人は何を考えていたのかなというのを含めて、それにまた書き加えるというふうに、3ラウンドぐらいやれるかなと思っております。余りまとまった議論じゃないんだけど、テーマに触発されて出てきた考え方のところにたまっていくやり方なんです。それをワールドカフェと称してやってみたら、それはそれなりにいろんなおもしろい知恵の蓄積が短い期間で見えてくるという話です。これだけたくさんの方がいれば、非常にたくさんの方の見方から考えが、ここに蓄積されたやつを最後に共用するという場面をつくり、そこからキーワードを引っ張り出そうというような企みです。前半は、そのための事例報告から触発されたものをもとに、そういうことをやってみようと思います。

それでは、最初におやこ劇場松江センターの代表の竹田さんです。現場のいろんな活動の実態からまず出発しようというのが、トップバッターにお願いしていることです。それに対して、いろいろな形で広げていく、つないでいく、展開を考えていくという流れになる発表が3つ続きます。

■竹田 尚子氏

おはようございます。松江で一番歴史のある松江大橋のたもとに事務所を構えている、おやこ劇場松江センターの代表の竹田と申します。

資料集の 28 ページの「市民による持続可能な子育て応援地域ポータルサイト構築プロジェクト」が、今回の資料です。今年、島根県少子化対策推進室と協働でやっている子育て応援サイトの事業をどのように進めているかという話を中心に、おやこ劇場がどうやって、日々、仲間をつくり、応援者をつくりながらやっているかという話をしたいと思います。

まず、おやこ劇場の紹介ですが、おやこ劇場とか子ども劇場が全国にあるということを御存じの方もいらっしゃると思いますが、子供たちと本物の文化の出会いをコーディネートする団体です。そこから派生して、子供たちの体験を増やすためにキャンプをやったり、親同士が信頼できる関係をつくって、その中で子供たちを温かくはぐくんでいきたいという思いがありますので、何でも屋になりがちなんですけれども、そこは子供をテーマにして進めているところです。

ちょっと魅力的な写真をとって、子供たちがいい顔をしている写真をそろえたり、お父さんが頑張っている姿を出したりしています。

これが、「しまね子育て応援サイト こことも」なんです。資料と違う写真、一番新しい写真を入れてみたんですが、子供たちを育てていく、子供が育っていく中で必要な情報を、行政もたくさん支援の情報を出しておられますし、私たちのような市民団体もたくさん出しているんだけど、それぞれがばらばらに出している状態ですので、ここさえ見ればわかるものをつくりたいということでつくりました。

これは、島根県からの委託でやっていますが、おやこ劇場は事務局という感じかなと思っています。こことも運営委員会というものをつくりました。これは、おやこ劇場の会員ではない方にも入っていただいて、子育てをする中でどんな情報が欲しい、どんなコンテンツがこのサイトにあったらうれしいということ、皆さんから意見をいただきながらつくっているサイトということが特徴です。それから、参加型のサイトです。お勧めサイト投稿というボタンがあるんですが、子育て中の皆さんが情報をくださってつくっていくものです。イベント情報なども、なるべく自分たちが何もしなくて済むようにという仕掛けなんです。皆さんと一緒につくっていくというサイトです。

それと、県の方と一緒にやっています。今日も来てくださっています。昨日の全体会で、思ったんですが、同じ目的を持って一緒にやっているのに、本当に敵対することも多いという言葉も出たんですが、行政とNPO、市民というのはいい町をつくりたいというところでは本当に一緒だということ、今回の協働で感じています。

おやこ劇場は全国にあります。松江センターは 1973 年につくりましたので、37 年の歴史があり、私は 10 代目の代表になります。市民団体ではすごく珍しいことらしくて、よくびっくりされます。次の世代につないでいくということ、何よりも大事に考えています。特徴として、前代表も、前々代表も、前々前代表も、みんな理事として残っています。それから、37 年前に団体を創設したメンバーが顧問や理事として残って応援してくださっています。

それから、コアなメンバーである理事会や代議員会で日々の活動を回しているのですが、その周りに 300 人の会員がいます。そして、その会員の家族が応援してくれています。さらに、その周りにまた理解者がいるという感じで、層になっているような団体かなと思っています。

すごく素人団体なのですが、私はそれをすごくいいことだと思っています。誇りある素人集団だと思うのですが、それは当事者だからです。私たちは子育てをしている当事者なのですが、その当事者が我が子と楽しむために、我が子と何か経験したい、体験をふやしたいと思って入ってきます。その人たちが当事者としてかかわる中で、我が子がかわいい、我が子の友達がかわいい、周りの子たちがかわいい、松江じゅうの子供がかわいい、そして島根県の子供、全国の子供、世界中の子供たちの動向が気になるという大人に育っていく会ではないかと思っています。その仕掛けを、苦労はしているのですけれども、楽しさを演出しながらやっているところです。

■林コーディネーター

NPO法をつくるときに、おやこ劇場とは随分かわりがあったんですよ。全国ネットなんですよ。1995年からNPO法をつくるための活動に入って、全国の方々の賛同を得たり、提案を出していただいたりする一つのネットワークとして、おやこ劇場に関わっていただいたことがありました。次は、杉原さん、どうぞ。

■杉原 幹雄氏

NPO法人大山中海観光推進機構に所属しています。

このNPOは、主に山陰中央部の観光情報を発信する活動をしています。私はグラフィックを専門としています。お手元に地図をお配りしていますが、それは、5年目のものです。最初は、その紙の半分のサイズで始めました。この地域を、鳥瞰図という方法で、県境を無視して描いており、5年目で今の形になりました。これは、「この指とまれ方式」で運営しています。つまり、似たようなマップが山ほどあるのですが、みんなが少しずつお金を拠出して、いいものをつくって、みんなに配ろうという趣旨で始めたものです。最初の1年位は、エリアも狭かったのですが、それでも50社の民間事業者や団体の協力を得て、10万部を発行しました。今は、200社の事業所や団体、県、観光協会などに協力いただき、毎年20万部は発行できるまでになりました。これを2次利用して御利用いただく場合もありますが、特定のクライアントから一括オファーをいただいてつくるといったことはありません。物品として皆さんに御購入をいただいています。島根で配布されたマップで、鳥取県の情報をご覧いただいたり、またその反対も・・・というような狙いでやっています。

来年のゴールデンウィーク前には、第6版を出そうという計画で、作画は自ら描いています。画が自分が行ったこともないところに差しかかるとペンが止まりますので、実際に行ってみるわけです。そうして、この谷筋はこんな感じだ・・・とかっていうのを思い浮かべながら、描いていきます。鳥瞰図というのは、全体が見えながら、しかもディティールもイメージでき、国土地理院の地図とは、違ったものなのかなと思いつつつくっています。

というようなことで、お金をどういうふう to 獲得していくかですが、考え方の基本として、こういう物品にして、お客さんに買っていただくところからお金を回さなきゃならないと思います。特に、観光の仕事は、旅行のお客さんが動いてくれてナンボの話なので、それでホテルや旅館が儲かって、次の仕事に繋がっていく。お客さんが動いてくれなかったら、我々のところには何も回ってきませんので、そのところで頑張っています。

ただ、現実的にいうと、資金をどう稼ぐかということよりも、儲かったものをどう分配するかということの方が、市民活動にとっては大事なかなと思っています。つまり、稼ぎは少なくとも、関係した人がお金に限らず、気持ちの部分も含めて、お互いに仲良く分配しあえるという流れが大切だと思います。

■林コーディネーター

今お聞きになっておわかりのように、地域を県境にこだわらずに、確かめながら歩くというのは珍

しいことで、役所の縦割りではやることができない。そういう人がいて、しかも、それを一つの仕事にしていくということが地域の中で具体的にお金を回していくことに役に立っているでしょう。だから、そういう人とお役所は、上手な連携をしていくと、自然に地域が見えるようになったり、地域の人の実感できるようになったり、地域の中でお金が回るという世界ができるんです。だから、グラフィックスによって、あそこにはあんなものがあるんだ、こういうふうに見えるんだという世界を共有することが。我々が議論している連携や協働のとても大切なキーになるんです。協働事業というのは、役所と市民活動を契約でやってしまうみたいな話ですが、そうじゃなくて、もっとソフトにやったらいいと思います。三代さん、よろしくをお願いします。

■三代 隆司氏

湖水街道推進会議の座長をしております、今日はその内容を中心に発表をさせていただきます。

お手元の資料ではレーク街道となっておりますが、先週、風景街道シンポジウムを開催しまして、その中で5年目にして湖水街道推進会議に名称を変更しました。資料は、29 ページです。この会は、国土交通省が日本風景街道事業というものを立ち上げられまして、それに地元の観光関連の自治体、NPO団体、地域の市民団体等が 20 ぐらい集まってつくったものです。私は、2年目から2代目の座長となりました。

高速道路無料化の話がありますが、あの道路特別会計でこの日本風景街道はできたもんですから、国土交通省がスタートすると言ったその年にポシャリ、予算がつかなくなったことから、四苦八苦しなながら、5年間を過ごしてきたという状況です。

経緯は、資料をご覧ください。現在、鳥取県の大山から島根県の出雲大社あたりまでの民間団体 28 団体がメンバーです。もともとは国土交通省の事業ですので、道路管理者 16 団体も入っています。国土交通省松江国道事務所や倉吉河川国道事務所、島根県、鳥取県、それから圏域市町村の道路課が顔を並べています。もともとはパートナーシップということで、会則も何もない、座長と副座長がいるぐらいの会でしたが、国土交通省の予算がつかなくなったので、ほかからいろいろ事業を持ってこないといけなくなって、会則をつくったり、監査役を置いたりして、団体の体裁をこの5年間で少しずつ整えていった状況です。

活動エリアは、ご覧のパワーポイントの映像のところ、ここに出雲阿国神仏霊場というのをつくられておりまして、その地域をめぐる街道のルートを持っています。それから、湖水ルートといって、宍道湖と中海がありますので、その湖岸を歩くルート、巡るルートが湖水ルートとしてあります。もともと街道事業というもので、いわゆる街道から見える風景を大切に保存していくために活動をするものになっています。2006 年当初は、70 ぐらいだったかと思いますが、今年になってもう 105 ぐらいになっていますので、各県にも2つ、3つぐらいは、この風景街道事業を展開している団体があると思います。この外側の神仏の通り路ルートは延長 320 キロでして、そこに 28 団体が活動しているということです。

事業の中で一番目立つのは、このレーク街道カフェというもので、9~10 月頃の夕日の見える日、特に土、日曜日あたりですが、宍道湖護岸でカフェを展開します。仮設のカフェを展開するのですが、こういう赤いものを湖岸に置いて、けばけばしいじゃないかというような批判もきつとあるだろうということで、コンセプトは練りまして、洋風の緋毛せんを敷いたお抹茶のカフェだというような形で設営しましたら、批判もなく現在に至っております。夕日がきれいだと、この場所に 200~300 人が集まりますので、コーヒーを出したりしています。それから、近隣の宍道湖・中海の喫茶店からも、非常にきれいな景色が見えるので、そちらの喫茶店には、そこから見える景色の説明プレートを置かせてもらったりしています。杉原さんの地図を使わせてもらって、事業に役立てています。それから、QRコードを使った紹介や、神社の皆さんと地元の匠の皆さんでコラボレート

した商品の製造に至っています。それを、あちこちで発表展示会をしています。圏域の中に、地元では非常に有名な美保神社があり、そこの歩行空間を確保するための社会実験などもやっていました。

このレーク街道カフェがメインで、QRコード的なものを杉原さんがつくっているマップと関連させて展開したりしています。

昨年から、花の事業に手を出しております。花だけをベースにして、たくさんある花見スポットの地図を、杉原さんの地図のレイヤーの上に重ねてつくったパンフレットもあります。デジタルのマップもつくっております、それぞれ花をつくっている人たちの情報発信ができるようになっていきます。最近では、一般家庭のお宅でも、庭をとってもきれいにされているので、オープンガーデンがこういう地域でもあるかもしれないと思って調べましたら2、3ありましたので、そういうものも取り上げました。

島根県、奈良県、三重県、宮崎県、鳥取県などで、古事記 1300 年祭を2年後に開催することになっておりまして、我々のこの圏域も出雲国風土記や古事記などの登場地がたくさんありますので、そういうものをめぐる旅を立案したいと考えています。

また、県の道路課が我々の活動に目をとめてくれまして、日本風景街道ということで、私どもが作ったマークとタイトルを掲げた道路標識も、これから圏域にどんどん増えていくという状況です。これは、20 社寺のお寺の入口に立てられた新しい看板で、ここにも私どものマークが使われています。

これは、先週開催した風景街道フォーラムです。毎年2回、中国地方で街道事業をしている人たち150~160人が集まるものです。そういうものに参加しますと、いろいろな活動の形態があって勉強になるといいますか、参考になるといような形です。

団体の紹介は終わりますが、私も昨年までの3年間、NPOの中間支援的な事業をしておりまして。昨年ここで、NPOの運営と戦略について講演したりしました。今、お話をした事業とは違う視点で、後ほどお話しできたらと思います。

■林コーディネーター

街道という移動空間を手掛かりに、歴史や文化などの風景資源の景色を楽しむカフェや、風景にちなむ商品づくりとそのQRコードを杉原さんの地図に重ねるなど、地域循環を創造するソフトな活動の紹介でした。タテ割りの予定した枠組みの中では得られない活動と発見が、NPOの特技であることがよく判るプレゼンテーションでした。

■加納 尚明氏

札幌市役所で2008年から3年間、任期付きで職員をしております。前職は、札幌チャレンジドという障がいのある方の支援をしているNPO法人の事務局長をしております。事務局長を専任でやってたのは、たった2年でございます、その2年の更に前は、18年間、企業で営業をしております、札幌チャレンジドでやったことは営業です。今もまちの営業マンということで、営業一筋

でやっております。

今日は、まちの営業マンとして、私が具体的にどんなことをしているのかということ、10分でお話したいと思います。

お手元の資料とは、全く違うことを言います。資料は読んでいただいて、わからなかったら、今日1日たっぷりありますので、聞いてください。

昨日の全体会でも申し上げましたが、今日は個別具体的なことをできるだけお話ししたいと考えていて、事例を2つ、お話しさせていただきます。

まず1つ目は、レッドリボンです。HIVの感染、病気についての啓発活動をしている団体で、全国にいろいろあります。そこで、札幌でもそういう活動をやっているレッドリボンさっぽろというNPO

法人の方が来られて、自分たちの活動を一生懸命広めたいと思っていますが、知名度がなくて、ピンクリボンさんがうらやましいと言われました。何とか自分たちをプロモーションしていきたいので、何かいい知恵ありませんかとのことでした。僕はプロモーションの専門家ではありませんので、電通の知り合いを訪ねて行って、3人でブレインストーミングをやりました。その中で電通の方が、いろんな活動があるので、レッドリボンだけでプロモーションをやるのは難しい。ほかに4色あって5色になったら、おもしろいことできるかもしれんよと言われました。ピンクリボン、パープルリボン、オレンジリボン、ゴールドリボンの4つがあるので、これらをまとめてみようかなと思い、その場を終えました。

それで、各リボンの人に、まずは活動の内容を聞かせてもらいに行き、いろんな話を聞かせてもらって、最後に今の課題を聞くことをすすめました。課題を聞いて返ってくる答えは、2つです。1つは、知名度がない。もう1つは、お金がない。これは、ピンクリボンですらそう言うのですから、ほかの団体なんか間違いなくそうなのです。

次に、ほかにもこういうリボンがあって、一度みんなで話ししてみませんかと誘ってみるのです。まだ、一緒に活動しましょうとは言わないのです。一つ一つのリボンは、みんなポリシーを持って活動していますから、ほかのリボンと一緒にやることについてガードを張るのです。そんなもんです、市民活動も。そして、集まる場を1回つくって、それぞれの活動内容を話してもらい、次に、課題をもう1回聞くと、課題も活動内容も同じで、自分たちの活動と通じるところがあると思うんです。これは、自分らしく生きるとか、女性と子どもの活動とかという形でくれるのです。そして、みんなの共通認識がぼやっとできたときに、私がおもむろに、共通の団体、ネットワーク活動をつくりませんかと言って、「SAPPORO 5 RIBONS」というのはどうでしょうねと言うと、何かおもしろいかもねって言うことになりました。でも、目的はあくまで自分たちの活動を知ってもらうこと、PRということにして、個々の活動には踏み込まないことで、団体を作りました。

その次は、金が必要、お金を集めないかん。スポンサーを探すのは、私の役割です。私は、サッポロビールにリボンちゃんというキャラクターがいたなと思って、サッポロビールさんにリボンちゃんつながりで、5 RIBONSの応援をお願いしました。そしたら、昨年、ちょうどリボンちゃん生誕100周年だったんです。それくらい知っててお願いに行ってるんですけど。サッポロビールで説明したら、おもしろいねと。今年だけしか応援できないと思うけどと言って、10万円を出してもらい、ピンクリボンさんのイベントに合流して、5 RIBONSの時間をつくってやりました。

その後、ちょっと動きは途絶えてたんですが、今年も何かやりたいていう話が5 RIBONSからありました。たまたま、運よくあるパチンコ屋さんが、市民活動団体の応援先を求めているので、5 RIBONSを紹介したわけです。パチンコ屋さんは、何か社会貢献しなきゃって部分が結構心にあるわけです。しかも、5 RIBONSがラッキーだったのは、5月5日の北海道新聞一面に、5つのリボン活動というのを紹介してもらった記事を持って行って、リボン運動が一緒になってネット

ワークをつくってやってるというのは日本初で、マスコミも注目していますと説明すると、応援すると言ってきて、200万円出してくださいました。そのうちの100万円を5 RIBONS のリーフレットを作り、残りの100万円は各団体に配分した事例が1つです。

もう1つは、市役所に入るときに、人と人をつなぐ仕事以外に、3年間で絶対1個やりたいと思っていたのが政策をつくることです。政策は、役所の会議室でできるものではないとっていて、市民と一緒に政策をつくりたいとずっと思っていたんです。

もともと不登校の問題に関心があって、フリースクールの人たちが開催するセミナーなどに参加していました。3、4回参加してみて、大変なことやお金がないことがわかるとともに、ひとつ思ったことがありました。彼らは、その先を社会に提示してなかったんです。それでは問題は解決しない、提示しなきゃいかん。その提示が正に政策提言なんです。お金がない、大変だ、お金下さいと言っても、役所からそんなに簡単にお金がもらえるはずもない。政策をつくるべきだと思い、それから半年間、そのフリースクールの方と月1回のペースで集まって、順番に物事を整理し、議論してつくりました。提言書は、「不登校の子供たちの育ち・学びを支え、最善の環境を整備する政策を実現するための提言書」で、私の名前はどこにも書いてないんですが、100%私がライティングをし、フリースクールの方たちに何度も赤ペンを入れていただいて、最終的にまとめました。提言書を札幌市長に提案するに際しては、教育委員会が窓口になってくれて、市長、教育長が並んでいる場面で手交式をしました。普通、渡したら終わるんですが、それじゃ意味ない。渡したところからがスタート、ここからが戦略なのです。これは、市民活動というよりは市民運動に育てなきゃいけないですね。来年4月に統一地方選挙があります。札幌は、市議、道議、市長、知事と全部選挙があります。これが一つのタイミングだと思っていて、これから半年間をかけて、市民運動と一緒にやってつくりながら、こういう政策提言を実現したいなということでやっております。

ちなみに提言書は、インターネットで「北海道フリースクール」で検索していただくと、ホームページからダウンロードできますので、関心がある方がおられましたらご覧ください。

■林コーディネーター

加納さんは、まちの営業マンなんだけど、話し合いを積み重ねながら、具体的な政策提案するところまで一緒にやるところが、非常にユニークに展開してきているというふうに思いますが。

■加納 尚明氏

先ほど事例は、まさに営業マンの仕事なんです。営業マンというのは、お客様の声を聞き、それをもとに企画をつくり、社内でサービスとして、商品としてつくっていきます。マーケットリサーチをするのは、営業の仕事なんです。社会の中で不登校の問題で困っているお子さんや親御さんがいて、それを支えようとして頑張っているフリースクールの人が出て、困っている話を聞く、これが企画書なわけです。それを、市役所という自分の会社に提案したわけです。これはまさに営業マンがやることを、形を変えてやっているだけです。ですから、私はまず役所の中にいません。一日中ではありませんが、とにかく毎日どこかに行って、いろんな人と話をするようにしています。

■林コーディネーター

今日は、行政の方が30名ぐらい参加していただいています、共通するところがありそうですか。

■参加者

NPO法人の認証を担当していますが、法の趣旨は書面だけでNPO法人を判断ということになりますので、なかなか実態、実情が見えてこないというのが現状です。

■加納 尚明氏

役所の仕事も役割分担だから、内勤の方もいるので、みんながみんな外に出られるとは限りません。でも、出るチャンスをどうやってつくるかということは、一つあると思います。理屈ですから。

■林コーディネーター

島根県にトライ事業というコミュニティービジネスの助成制度があって、公募して、公開審査で決めるのですが、その審査委員長をやりました。その時、県にお願いして、審査の前に提案のあった現場の訪問を、毎回、年3回の審査毎にさせてもらいました。現場を訪ねてやりとりすることで、初めて中身がしっかりしてきます。認証の仕事で現場に行くのは、相手を叱りつけに行くわけではないので、仕事のやり方を変えていくと、別の意味が出てくるかもしれません。

■司会（井ノ上）

4人の方のお話から出てきたキーワードをアトランダムに申し上げますと、必要な情報をどう情報発信するのか、情報発信の質と方法もありました。

次に、NPOのミッションも行政のミッションも、その部分では同じで、次世代につなげていくことだというようなこともあります。

それから、NPOであれば活動、行政であれば施策を、どんなふうに表現、見える化していくのかというところで、デザインですとか、グラフィック化、音楽などの手法があります。これをどんなふうに目に見える化するのかというテクニックがすごく重要だというお話も出ていました。

さらに、そうすることによって、それらの情報が共有されて、展開することによって、資金を生み出していくことにもつながっていくという話もありました。

あと、士気にもつながるという話と、どうやって活動の資金を循環させていくのかも課題であるという話がありました。

三代さんからは、パートナーシップというキーワードで、広がりにつながりということがありました。

まちの営業マンの加納さんからは、現場を知る、声を聞く、課題を知る、企画をする、提案するというお話があり、5 RIBONS のお話で、いろんな活動をしている方たちが一緒に考える場があると、それが明確になってくる。どうやって実現化、具現化するのかという資金集めの段階に入るときには、行政の果たす役割というのは大きくて、資金提供との間でつなぐ役割ということもありました。

そして、情報発信の工夫ですね。これは、どんな人たちと一緒に情報発信するのかということと、質、方法にも工夫が要するというお話でした。

あとは市民と一緒に本当に必要なことを政策として取り上げていくのかというプロセスについてのお話もありました。

■林コーディネーター

竹田さん、つけ加えるキーワードがありますか。

■竹田 尚子氏

すべて出てます。目的が一緒の人たちは、たくさんいると感じています。先ほど、行政とNPOと言われましたが、NPOと行政は、NPOと行政のために動いているのではなくて、市民のために動いています。市民の幸せとか、市民にとってのよい町というミッションのために、このときはこ

っちの人と組み、このときはこっちの人ということをしています。

また、加納さんみたいな方がたくさんおられたら、私たちの団体の力が落ちないだろうか、頼っちゃわないだろうかということをおもいました。

■加納 尚明氏

自分が出過ぎたらだめです。自発性を促すことが大切です。集めるところまではやるけど、集まった後は放置しておきます。放置して大丈夫です。だって、みんなそれぞれ熱心に活動しているし、必ず何か生まれる。場さえつくってあげれば、結構何とでもなるのです。

■林コーディネーター

三代さん、街道のお話をどうぞ。

■三代 隆司氏

街道事業は、この圏域で幾つかの団体がそれぞれ活動していて、本当はその活動と連携してできればいいんですが、それがまだ十分できていない状況です。僕らも、出雲大社や松江城、宍道湖や中海ぐらいの雰囲気はわかるけど、全体の風景のことをよくわかってなかった。風景学の勉強をする中で、風景をどんなふう守っていくかというようなことがだんだんわかってきて、名称も変更して、いろんな立て看板まで立ててもらえるようになったんで、ちょっと仕切り直して、やっとちょっとステップできるかなというところにいる状態です。

私が所属しているNPO団体は、4つあります。会社勤めの私が、NPO団体の活動をしてみてわかったことは、企業も役場もそうですが、主任、係長、課長、部長などの職により、指揮命令系統がはっきりしているのだけれど、NPO団体というのはボトムアップで、とにかく集まったみんなと相談して決めるわけで、そういう組織をどうまとめるかがかなり難しく、結構女性の方が得意だったりします。組織で働き過ぎた男性は、どうやってまとめるかを困っちゃうんですが、そこを上手にまとめることができるリーダーが、NPOをうまく引っ張っていけるのかなって感じています。

県内で3年間で15団体以上、補助金を助成する事業に関わっていたんですが、リーダーの皆さんが非常に温厚で、動くときには素早く動くタイプの人たちで、地域に対する情熱が深いと感じました。そういうリーダーたちが、川の流れのようなものをうまくつくれたらいいのじゃないかなと思います。そのときにやっぱり忘れてはいけないのが、何のためにやるのかということと、誰と誰をつなぐのかとかいうところをしっかりと持っていることで、事業の展開が次のステップに繋がっていくと思います。

県から、街道事業の街道に、1300年祭に関わる神話の地を入れてくれないかと言われて、一部の者は了解したんですが、最終的にはやめました。僕たちは、このエリアの風景をどう守るかが目的で、このエリアの風景は、水があって成り立つ風景だということを振り返ってみると、神話があるからって街道を引き伸ばすわけにはいかない。神話があって何かしたいなら、ここに新しい街道事業をつくったらどうかっていうことで、やめました。5年前なら、それが言えなかったかなと思います。

自分たちが何を考えて、何をしようとしてるかを、絶えず振り返らないといけないと思っています。

■林コーディネーター

広域のテーマでしたが、活動のテーマが風景であって、それを巡るいろいろな連携や現場の話、勉強の話もあるというふうにつながっていくことなので、何か取り上げたテーマを、風景街道から始

まってそれを展開していくときの展開のチームづくりや、あるいは活動の展開の仕方、それからそれがだんだん展開していくと、マーケティングになってきたり、何かいろんなふうに発展するんだと思いますが、そこら辺の話が魅力的なポイントですよね。それが、地図とつながってわかりやすくなるというあたり、チーム同士の協働に至ることもあるんですね。

■三代 隆司氏

中国地方では、日本風景街道 夢街道ルネサンスという事業があって、この圏域では美保神社と木綿街道が選ばれ、古い町並みを守る活動をしています。それは、風景という大きなものではなくて、街道の景観というようなものです。その木綿街道の屋敷の庭には、砂が入っていい、石組みがあって、松があるのですが、地面が赤いんです。それは赤い砂でつくられているのですが、僕は初めて見ました。この砂は、飯梨川から持ってきたとのことでしたので、半年ぐらい、飯梨川を探したり、知り合いに聞いたりしましたが、全然わからなかったんです。でも、つい先日、伯太川で赤い砂を見つけたんです。ここら辺の職人たちに、木綿街道の庭の話をする、この近くに安来港という港があって、昔、平田の港と水上交通で結ばれていたというつながりがわかりました。それが縁で、安来と木綿街道の人たちが、交流をしようという話になってるという状況です。ですから、目的を持ってつなげたわけではないんですが、地域に入って、地元の人たちとかかわることでおつき合いが生まれ、そういったことが生まれることは、うれしいことだと思っています。

そして、このきっかけの1つはツイッターです。日々の活動を綴ったりするものです。木綿街道も、最近ツイッターが出てて、知り合いの様子がよくわかります。イベントの前に蔵の掃除したというようなことなど、離れていて見えないグループの活動が見えてきて、気安く声をかけ易くなるし、ちょっとつながるといのは非常におもしろい。ブログやSNS、メーリングリストなんかとさらに違った効果があるなと思っています。

■林コーディネーター

この発見の旅、地域の知らず知らずに発見と文化と、文化と発見と行ったり来たりする。それを伝えるのがツイッターだったり、SNSだったり、様々な新しいコミュニケーションのメディアなのです。メディアをうまく使いながら展開してるネットワークでもあるんですね。多分加納さんがやってるのは、まちの営業マンっていうコミュニケーターですね。だから、コミュニケーションが営業の心髄に隠れている。コミュニケーションとはまず聞くことです。ワークショップでも、とにかく聞く（ヒアリング）がキーワードです。聞いていると、課題や共通のみんなの関心事が見えてきて、それがつながる話になっていく。加納さんはマーケティングと言われたけど、市民の世界に自然に入っていき、そんなところがある。そういうものが今度は杉原さんの手にかかる目に見える形になってくる、目に見える形が三代さんが出会った真っ赤な庭から安来の港につながっていく。地図を作ることで杉原さん自身もいろんな発見や発掘をしていく。常に現場、いつもまた現場に戻って行って、具体的な人と出会っているということがすごく重要なキーワードですね。

そろそろ整理をしたいと思います。テーマとしては、1つは行政マンが、どの様にまちの営業マンになれるかということです。まちの営業マンとはいうものの、加納さんはお役所とNPOの両方の経験がある。実は皆さん、お役所の立場で、まちの営業マン役割を展開できるのか疑問に思っておられる。あるいはお役所も、展開の仕方を変えたらいいんじゃないかと思っているかもしれない。加納さんは、常に現場に行ってるから、現場から、すべてのことが見えてくる。今日は、その現場が、この分科会のワールドカフェの場です。テーブルでいろいろ考えるテーマを4人のパネラーの発表を手掛かりに書き出してみようと思います。

市民とのチャンネルと書きました。その下に小さくまたテーマの1つを、まちの営業マンだとか、書き添えていただけるといいと思います。

三代さんは、発表を聞いてると、いろんな形のネットワークづくりをやっておられる。この場合は、テーマを風景街道とつかまえて、それをもとにネットワークをつくっていく。ネットワークをつくる活動は、文化にぶち当たったり、勉強になったり、人と出会ったり、探索的なプロセスをたどる。それが人と人をつないで、新しい発見、例えば赤い砂と赤い庭と赤いお墓との出会いになる。

どういうテーマの表現が、一番ピッタリきますか。

■三代 隆司氏

それは、さっき林さんも言われましたけど、神話があったり、銀山とかたたらっていうのがある地域なので、ちょっとそれに踏み込んでしまうと、奥が深くて、それでもう何かずうっと神話の地をあちこち巡ったりしてしまっただけで、これは土地の魅力ですよ、この場合はね。土地の魅力と、本当にやっぱりそこで生きてる人の魅力があるわけですよ。それに触れるのはとっても楽しい。

■林コーディネーター

なるほど、土地の魅力と人の魅力に触れる。それが2番目かな。

今日の僕の発見は、とにかく地図がもう大変ショックだった。見えるようにすることのすごさです。見えるようにする仕方はいっぱいあるけども、地図は独特の可能性がある。犬地図って発明した人がいるんですよ。犬は嗅覚でまちを認識する。それを地図に表現したのが犬地図。キーワードでは、見える化ですか。

■杉原 幹雄氏

見える化というのは、大事なことだと思います。それで、あの地図の表現技術を評価していただくのはうれしいですけども、200以上の団体の事業参加を獲得するために、実際にスタッフがフェイス・ツー・フェイスで300以上の事業所を歩いて、どぶ板営業しているわけで、そういった形で運営できていることの方が僕には誇りなのです。

■林コーディネーター

さっき言われたことは、もう一つは必要に迫られるというか。それから出てくるという。

■杉原 幹雄氏

「必要」というのは、いわゆる「この指とまれ〜！」という「この指」を「大義」として、高く、いかに振りかざすことができるかということと、加納さんがおっしゃったけれど、いい場をつくること。そう

すれば、そこから自然に何かが出てくるはずですよ。

例えば、どっかにお店を開きましょうっていうような話で、僕もいろいろそういうお店のプランとかつくってききましたけども、東京のどこどこでこんなお店がはやっているから、じゃあ米子でもやろうよというふうに、そういうものを持ち込んできても、そういうお店のコンセプトに対応できるようなスキルを持った人が周りに全然いなかったりするんですよ。それよりも、じゃあ今度の店は、あなたとあなたがスタッフなんですよっていうところから、そこにふさわしいコンセプトを立ち上げた方が何ほかい結果になるみたいなこともあって、その辺、取り違えないようにするか。

また連携を進める上で僕が必要を感じるのは、そういった大義をいかにかざすかという部分なので、これをみんなでディスカスしなきゃいけないということです。全国の中で、特に観光客の動向数値でいうとビリを争っている島根と鳥取は、これじゃあ駄目だ、力を一つにして何かやろうぜという気持ちに本当になれるかどうか。しかし現実には、やっぱりそれぞれ、役所の力学なり事情が先に

働くケースが多いのでなかなかそれが上手くいっていない。民間ならそんなことはないですよ。一緒にやろうやってみたら意外と簡単にぱっとできる話なんだけど、その辺のところはなかなか、こちらから見ると障害になってしまう部分もあるのかなってというような気がしています。

■司会

いい場があれば何か生まれる。この場づくりが大事ということで、生まれる場づくりはいかがですか。

■竹田 尚子氏

事業型のNPOというのは、新規の事業を立ち上げて、助成金を取ったり、補助金を取ったり、委託をもらうことがすごくしやすいと感じています。だけど、困り事解決型の市民活動型のNPOというのは、特に子供とか福祉関係そうですけど、新たに生まれてくる子供たちのために同じことをずっとやっていかなければいけない、行政の仕事と似ているところがあると思うのですけれども、次の子供たち、1回やったら終わりではないので、持続していくとか継続していくってことはすごく大事な活動もあるのだということを思っています。活動から運動へと、加納さんの言葉を、ああ、そうだ、そうだったと思いながらさっき聞いたんですけれども、困り事とか、日々の生活にすごくもっと密着した部分のテーマを何か今、つくりたいなとすごく思いました。

■林コーディネーター

今、加納さんが取り上げてるのは、障がい者、障がい児、つまりチャレンジドの事業です。不登校の子どもたちのため活動するNPOの支援として、役所ができることは何か。NPOが地域でいろいろ展開できるような、仕事ができる仕組みを市が作るのを考えた話がありました。

NPO法を作ろうというきっかけ自体が、阪神・淡路大震災で、あの時が日本のボランティア元年だった。今でも、4万NPO中のボランティア型の割合が大きい。

しかし、最近では、札幌チャレンジドもそうだけど、障がいなど、問題を抱えている人たちのための活動自体が自立した事業体になる例が広がっている。

だから、助成金だけじゃない形で事業として自分たちは自立していきたいというのが、トレンドです。アメリカ、イギリスでは、自立した事業体になること自体も大きなテーマで、その事業体が地域再生の主要な役割を果たすのです。

■加納 尚明氏

竹田さんが危惧されたのは、そのとおりだと思っています。多くの団体は、慈善型、困り事解決型なんです。では、慈善型は事業型になれないのかといたらそんなことはありません。すべてのNPOは、やり方次第で事業型になれます。それこそが、工夫と行動力なんです。だから、お金がない、お金がないので全部手弁当と言われる方がいますが、それはやり方の問題だから、そういうやり方でやりたい人はそうやればいいし、事務局に人を雇用して給料を払ってやりたい人は、そういうやり方を模索するということが大切なのです。事業型になりたい人に対して、行政がどうサポートができるのかということも、考えていただければと思います。

■三代 隆司氏

竹田さんの肩を持つんですけれども、子育て支援というのは、ルーチンに近いという感じがします。毎年毎年、新しい事業を生み出していくのは、大変だし、兄弟で同じ体験をすることが大事なこともあるので、毎年メニューが変わるのも、どうかなというのがあります。NPO活動には、ルーチンでやっていく部分もあるわけだから、そこに対してどういう支援をするかっていうことも、行政で少し考えていただきたいと思っています。

■竹田 尚子氏

志という言葉を使ってみたいと思いました。個人の困り事をみんなで解決するとか、1人の志をみんなの志にしていくみたいな感じはどうでしょう。

■林コーディネーター

市民活動の方、何かテーマがありますか。

■参加者

竹田さんの話と加納さんの話は、そう違いはないのかなと思います。こういう協働のワークショップは、ネットワークや場をつくれればという議論に陥りがちなんですが、ネットワークや場に慣れていているとか、もう飽き飽きしているところもあります。というのは、私がそういうものをつくりながら、失敗しているからなのです。私としては、この指とまれの指がどんな指だったらみんなが集まれるのかとか、成功に結びつくのかっていうところを、すごく見ているところがあるのですが。

■参加者

私の住んでいる広島県東広島市は、こんなに意識の高い行政職員はいらっしゃらないと思っています。ですから、今日ここで、このようないろんな議論を聞けるということ自体が、次元が違うなというふうに感じています。私が、いつも感じているのは、行政の方に何か提案をしても、一生懸命、断る理由を探してきます。どうやったらできるかではなく、できない理由をうんざりするほどされます。最近、協働という言葉をよく耳にしますが、行政と市民との協働について、ずっと考えていまして、そういう勉強ができたらいいなと思っています。また、先進的なレベルまで達している自治体があるわけですから、我が市はどうやったらそこにたどり着けるのかなと思っています。

■司会

4人の事例発表から、テーマを4つ作りました。1つが市民とのつながりで、まちの営業マンとか、行政の役割など。それから、1人の志をみんなの志へ。想いを形にしていくという話が先ほどありました。それから、何かが生まれる場づくり。あとは、土地の魅力と人の魅力。以上、4つです。

■林コーディネーター

皆さんに、まず最初に入ってみたいというのを印していただけるといいなと思っているのです。土地の魅力にまず入りたいという人は、最初にこの赤い色のシールを張って、その横に名前書いて張ってください。

●グループ発表

■参加者

黄色グループで、「一人の志からみんなの志へ」というテーマで話をしました。まず、NPOさんは、志をPRするのが得意じゃないという意見が出て、プレゼンテーションとかPR能力を高めることが必要じゃないかという話が出ました。とは言っても、その志自体をNPOさん自身や外に向かって広めていく、共有化していくことはとても難しいんじゃないかという意見も出ました。そんな中で、NPOさんのリーダーには、そういった志、理念を共有化するようなリーダーシップが必要じゃないかというような話が出ておりますが、その志も長期的に続けていくことはとても難しく、結果として、それが団体の路線変更につながることもあるが、それはそれでいいのじゃないかなということがあります。最後に、そういった志が、NPOが最も得意とする合議で、志自身を決めていくという一番の強みを生かしていったらどうかというような話が出ました。

■加納 尚明氏

話はいろいろ出たのですが、かなり大ぐりにまとめちゃいました。このグループは、「市民との

チャンネル」ということで、市民と行政がどうやってつながって一緒にまちづくりをしていけるんだろうという話をしました。最初の方は、市とか市民には、いろんな課題があるとの発言でした。一方、協働を進める方法について議論しました。お互いを知ろう、相手の立場になろう、企画から一緒にやろう、ということがありました。

■参加者

テーマが、NPOをつなぐで、土地の魅力と人の魅力ということでした。地元の人を含めた第三者に、その人の魅力とか土地の魅力を再発見してもらって、その両方に自信を持つことがまず大事です。そこから、そういうのをうまく語っていく語り部が必要だということ。さらに、支援組織とか町内会に代表されるコミュニティーですが、そのあり方が限界に来ていて、次のコミュニティーが気になるのですが、キーワードは子供だと。家族の中心には子供だし、地域の中心にも子供がいる。子供がいる町は、すごく明るくて楽しいものだから、やっぱりキーワードは子供なんじゃないかということでもとまりました。

■参加者

私たちの班は、「市民とのチャンネル、つながり」というテーマでした。まず、行政がNPOから企画提案を受けるわけですが、その際に重要になるのは、行政と市民が同じ視点に立って考えることから始めるということです。

その際、一番重要になるのが見える化です。見える化を進めて、お互いによく知り合うことから、信頼や信用が生まれてくるということです。行政も、どうしたら実現できるのかということから、一緒に考えましょうということでもとまりました。

■参加者

土地の魅力と人の魅力ということでも話しました。大きく分けると、役所が地域とつき合うにはということ、地域と役所のかかわり方について、いろいろお互いの理解をってもらう必要性とかを話しました。あとは、他の地域に入る難しさ、受け入れる場、人についてです。結構いろいろ出ております。あと、地域の魅力、人の魅力については、小さな発見をさせるということで、島根の魅力的なところについて話が出てきたり、実際にその場に行くとか、よその人に話してみることで気づきがあるといったことがいろいろ出ております。

■参加者

テーマは、何かが生まれる場ということで、人の集め方、人のつなぎ方、集める目的という3つのカテゴリーに分けました。

人の集め方としては、場所の提供の重要性ということです。それと、物でつる、食でつるということで、きっかけづくりの提供が具体的例です。

次に、人のつなぎ方としては、自己紹介ということで、紹介することによってフレンドリーに打ち解けていくというようなきっかけをつくっていく。それと、おもしろい発想なんですけど、年功序列を壊すということで、若い人からの意見だとか、いろんな持ち場での情報源とかお持ちですから、お互いみんな立ち位置を同じくしてやっていくということですね。

最後、集める目的ですけれども、目的の有無は問わないという反面、集める側の意図をしっかりとさせるということです。相反するようですが、目的というのは何とでもなるよというような、いろいろ多彩に分かれていますということがまとまった答えです。

■参加者

いろいろな方の意見が聞けて、自分の考えがまとまったり、ぐちゃぐちゃになったりしましたが、違いがあって当たり前ということと、それをまとめるプロセスが大事だということを感じました。

■参加者

こういうやっていく手段というか、こういうことが大事だなというのを話しました。

■参加者

普段、自分たちの狭い視野でしか行動していなかった。行政はこう、NPOや市民はこうっていう固定観念があったのですが、行政の方とお話しして一番驚きだったのが、休日にNPOの活動に参加していますというのを幾つかお聞きして、目からうろこでした。そういうことを、自分たちの町の職員さんにも伝え、何か同じ場に立てるようなきっかけづくりができればいいなと思いました。

■林コーディネーター

今日のもう一つのテーマは、とにかく現場に行ってるということ。現場をちゃんと知ってるというのは、そこに情報の宝物があるということなんです。

■参加者

NPOに関して、島根は非常に進んでいるなということを痛感しました。行政の立場、そして私個人としても女性のグループに参加している視点から、行政に望むこと、行政から望むことを、もう一度考え直すきっかけになりました。

■林コーディネーター

最後に、パネラーの方から一言ずつお願いします。

■竹田 尚子氏

ワールドカフェで、協働に努力する行政の方たちの失敗体験とか、暗い体験とか、NPOに振り回されてつらい思いもした人が結構いることがわかりました。そうなのだと思いますながら加納さんのテーブルに行ったら、「問題点を言ってるけど切りがない、変わらない、いいことを見ていこうよ」ということを言われ、明るい気持ちで終われそうです。

■三代 隆司氏

NPO法人のほかに、島根県ウォーキング協会と松江ウォーキング協会の事務局長もしています。この地図に載ってる地域の48箇所に、出雲国風土記ウォーキングコース、平均10キロぐらいのコースがつくってあって、これを巡り歩いたりもしています。さっき、土地の魅力、人の魅力のところで話がありましたが、ウォーキング始めた頃に、家の周辺を10キロほど歩いたら、発見がたくさんありました。ウォーキングで、町内を4、5キロ歩けば、ちょっとした観光旅行なんです。車では通り過ぎてるんだけど、歩くと粒さに見えて。そうすると、こうやって人がたくさん集まってきて、初めて会った人が、ウォーキングは行かないといけないけど、ここは人がやってきてくれて、ここに一つの新しい場ができて、その場で初めての人とちょっとずつ話すことで、人間とか社会とか、本当にありとあらゆることの発見ができるっていうふうに感じるの、本当に人生って発見の連続ではないかなということ、今日のワールドカフェでも感じるどころでした。

■杉原 幹雄氏

昨年まで、井ノ上さんのNPOと三代さんのNPOは、同じ屋根の下で活動しておられました。これは、僕らから見て随分うらやましかったんです。つまり、いろいろな情報を共有したり、スキルをアップするためには随分有効だったはず。もう一つ欲を言えば、役所の担当課さんも同じ屋根の下に入っていれば尚いいのになんていう感じがします。本当に市民の力をアップさせようと役所の人が思うのであれば、ぜひ町の中に出かけてきて、あるいはその町の使われてない建物のフロ

ア、一画をそういう場所にして、自分たちもそこに入って、そこに拠点を設けながら市民の皆さんと一緒に活動できるようなことをやっていただきたいと思います。

■加納 尚明氏

行政の皆さんにお伝えしたいのは、今いる部署から次の部署に異動したときに、今、皆さんが思っていることが、どう展開されるのかなんだと思います。その答えは、御自身で見つけていただきたいと思います。

それと、NPOの方に対しては、行政は3年で異動します。これは我慢しよう。来る人来る人に唱え続けよう。そのうち、唱え続けなくてよくなるはず。多分、10年から20年かかるかもしれないんですが、そういう時代をつくらなきゃいけません。目と目でわかっているからみたいな職員が来てくれりゃ、もうスタートラインは明らかに変わるわけですよ。それは、やっぱり僕たちはそれをやり続けるしかない。あきらめたら終わりなので、お互いが努力をする、市民の人はその目の前の人たちに、行政の人にそうやって向き合っていくし、同じように行政の人は次の部署に異動したときに、自分はどう振る舞うかということをお互いが努力していけば、きっと明るい社会になると思います。

●コーディネーターの〈あとがき〉

ワールドカフェは、1つの結論に収斂するというのではなく、参加者の多様な対話を共有しつつ、参加者それぞれに、カフェでの語らいから得たものを持ち帰るところに独特の良さがあると思います。参加者の皆さまに感謝します。